

聖路加看護大学紀要第 40 号刊行にあたって

学 長 井 部 俊 子

聖路加看護大学は、1973（昭和 48）年 7 月から大学の定期学術研究業績集として、聖路加看護大学紀要を年に 1 回発行することになった。本紀要の第 40 号を刊行する 2014（平成 26）年は、本学が 4 年制の看護大学となってから 50 年目の節目を迎える年である。

日野原重明学長（当時）が、1994 年に「紀要第 20 号刊行にあたって」挨拶のことばを述べている。その後、紀要第 20 号から紀要第 40 号刊行までの 20 年間に掲載された論文数は、原著論文が 39 編、総説（論説）が 17 編、報告が 123 編、資料 4 編、短報（第 36 号以降）が 42 編となった。これらの研究業績は、本学が何を志向し、どのような教育研究活動を行ってきたか、時代の関心は何であったのかをまざまざと指し示してくれる。



第 21 号（1995 年）の「資料」には、「学生の実習用ユニフォームの変遷」（萱間真美他）があり、第 22 号（1996 年）には本学の改訂カリキュラムについて、1993・1994・1995 年度カリキュラム委員会が報告している。それから 10 年後の第 32 号（2006 年）には、2000 年度から 2004 年度のカリキュラム評価について、2005 年度カリキュラム検討委員会が精力的に報告している。

巻末の「編集後記」もおもしろい。第 19 号（1993 年）では査読を導入してほしかったことや、フロッピー入稿になったこと、檜垣マサ先生が急逝されたこと（第 20 号、1994 年）、英文抄録を付け、学内の主な学術活動の概略を掲載することにした（第 21 号、1995 年）ことがわかる。第 22 号（1996 年）の編集後記には、紀要への投稿が多く、「委員が嬉しい悲鳴をあげる」一方、紀要委員であった渡邊真弓先生の逝去を悼んでいる。第 23 号（1997 年）では聖路加看護学会の設立を報じている。「ミレニアムの初年にふさわしく、多彩な内容の紀要第 26 号をお届けします」と今は亡き助川尚子委員長が編集後記を書いている。紀要第 28 号（2002 年）は園城寺康子委員長が編集方針の変更を記している。日本語の論文は、科学技術情報流通技術基準（SIST）に対応した論文形式を採用し、英語論文は APA か AHA のスタイルを採用することに決定したこと、正式に原著論文は必ず査読を行うこと、そして、教員研究活動一覧、博士論文・修士論文題目一覧、総合看護（卒業論文）題目一覧は「年報」に移行したことなどが記されている。そして、紀要は装丁を見直し、すっきりと洗練された構成となったと第 29 号（2003 年）の小松浩子委員長が記している。

紀要第 30 号（2004 年）からは A 4 サイズとなり、「本大学の歴史的快挙である COE 拠点の獲得によって、今後 e-learning がどのように発展を遂げていくのか楽しみ」と井部俊子委員長が記

している。第33号(2007年)では「紀要の品格を保つために」、紀要規程と投稿要項の改訂、英文論文投稿要項の追加、非常勤講師への投稿の呼びかけ、論文のKey wordsの書き方の整理、紙質・フォントの向上を行ったと、深谷計子委員長が記している。この号には、「生命倫理におけるミシェル・フーコーの可能性」(倉爪真一郎)という本学紀要としては異色の論説が掲載されている。そして編集後記は予告なく、この号をもって断筆となった。

今や、「聖路加看護大学紀要」はすべて電子化されており、聖路加看護大学電子図書館システム(URL:<http://quilt.slcu.ac.jp>)にて検索閲覧することができる。

聖路加看護大学紀要は、本学で活躍した同僚たちが足跡を残し、後輩が彼らと出会う知的な広場として存在し、さらに、本学の知的財産の結集をみることができる。こうして紀要は歴史的な価値をもつことになる。改めて歴代の紀要委員会の貢献を称え、紀要に投稿して下さった皆さま、論文の査読をして下さった皆様、紀要を愛読して下さった多くの皆さまにお礼を申し上げたい。

